

# HIMALAYA

# ヒマラヤ

# No. 285



**1995 AUGUST**



**日本ヒマラヤ協会**  
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

# 1996年登山隊員募集

## 玉珠峰 (6,179m)

世界の屋根である青藏高原に美しいスノーピークがあります。短い期間で高峰にアイゼンをきしませたいと考えておられる方のために22日間のキャンプを企画しました。(H A Jでは既に2度登頂) 青海省の省都である西寧から西へ約1,000キロ。山中には1週間滞在の予定です。

記

1. 期間:1996年7月21日～8月11日(22日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:60万円
4. 切り:定員になり次第
5. 資料請求先:H A J事務局

## ムスターグ・アタ (7,546m)

シルクロードのド真中、パミール高原にどっしりと腰を据えて聳え立ち現地に住む人々から「氷山の父」として親しまれているムスターグ・アタでサマー・キャンプを行います。なお、アタを舞

台としたサマー・キャンプはこの年をもって最後とする予定です。

記

1. 期間:1996年7月21日～8月25日(36日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:85万円
4. 切り:定員になり次第
5. 資料請求先:H A J事務局

## ヌン (7,135m)

インド・ヒマラヤのサマーキャンプとして、1996年夏もカシュミール・ヒマラヤで開催します。カシュミールの盟主ヌンの高峰登山とラグックの素晴らしい雲上のヒマラヤの旅が楽しめます。

記

1. 期間:1996年7月21日～8月25日(36日間)
2. 隊員:10名
3. 費用:75万円
4. 切り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

### 表紙写真

新疆ウイグル自治区の西端に聳える名峰、ムスターグ・アタは、古くから知られた山である。1993年の夏、私もこの名峰に憧れてカラクリ湖より仰ぎ見た。素晴らしい山容であった。

(谷田川武)

## ヒマラヤ No.285

- |   |                |
|---|----------------|
| 1. PEOPLE                                   | Jiang Xiu Zhen |
| 2. ヒマラヤ登山国際シンポジウム(ラサ)                       |                |
| 3. チベット登山隊の12名に栄誉奨章                         |                |
| 4. ミニヤ・コンカ訪中団峨眉山へ                           |                |
| 5. インド・ヒマラヤを楽しむ(1)                          | 沖 允人           |
| 9. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・ヒマラヤから・トピックス・インフォメーション〉 |                |
| 12. '95サマー・キャンプ、ヌン峰計画                       |                |
| 16. 中国高峰登山15年小史(5)                          | 山森欣一           |
| 20. 平成7年度通常会員総会報告                           |                |
| 28. 寸感・事務局日誌                                |                |

このところヒマラヤ登山の世界で、台湾岳人が活躍している。リードしているのは、高銘和氏と梁明本氏の2人である。

高銘和氏は、1989年夏インド・ヒマラヤの秀峰ヌン登山が初めてのヒマラヤであったが、出発前に大勢のメンバーを引き連れて、HAJルームを訪れたことがあった。ヌンの登頂は成らなかったが登山の模様をビデオにして送ってくれた。

翌90年には、HAJにも縁の深いフカム・シン氏と合同でサセル・カンリIに挑戦し、氏を含む4名が登頂に成功した。この時、同峰の女性初登頂者となったのが、サントシュ・ヤダブ嬢である。

氏は91年チャー・オユー、92年チョモランマと挑戦するが、もう一息のところまで登頂を断念している。

一方の梁明本氏は、1991年秋シシャパンマに挑戦したが登頂は成らなかった。この時は長野県山岳協会隊の雪崩事故があり、台湾隊のドクターが負傷者の面倒をみてくれたようだ。

93年春にはチャー・オユーに挑戦し、女性を含めた4名が登頂に成功した。

そして今年95年春には、中華民国山岳協会50周年・台湾登山発展50周年記念隊」を率いてチョモランマにやって来た。男性8名、女性5名にシェルパ7名。カトマンズからザンムーを経て3月23日BC建設。4月19日にはノース・コルにC4を作り、5月11日8,300mにC6を出した。

翌12日中国時間の午前2時40分、陳國鈞(28)と女性の江秀真(24)は、ミンマ、テンジン、ラクパの3名のシェルパと共にC6を出発。9時間後の11時40分登頂に成功した。

台湾によるエヴェレスト登頂は、2年前の93年に中国との合同登山隊に参加した呉錦雄が最初であるが、江秀真は台湾女性初の登頂者となった。

梁明本氏は、1948年生れの今年46才であるが、次はマカルーカK2を目指したいと抱負を語ってくれた。

実は登頂に成功した江秀真さんは漢族である。つまり彼女は「漢族女性初の世界最高峰登頂者」



となったのである。

周知のとおり、中国女性のエヴェレスト・サミッターは、1975年5月27日、田部井淳子さんに遅れること11日で登頂に成功したパンドーさんがいるが、彼女はチベット族である。又、1990年5月9日に登頂したグイサンさんもチベット族である。

漢族女性の八千メートル峰登頂者は、1990年春京都大学隊に参加して、シシャパンマ中央峰に登頂した佟璐さんが初めてであった。江秀真さんは漢族女性としては2人目の八千メートル峰登頂者となった。

江秀真さんは、ステンレス会社に勤めるOLで、1980年代後半から登山を始めた。台湾では、12月～3月の積雪期の五岳縦走を主体とした山登りを続けているが、高所登山は、今回のチョモランマが初めての経験であった。

チョモランマのためのトレーニングとしては、国家体育学院運動科学研究所の低圧室に、週に2～3回、4ヶ月間通ったと云う。チャンパー内での訓練は、酸素マスクをつけて、七千メートル台で30kgの荷を背負い、八千メートル台で20kgの荷を背負って行った。

ラサに下山した一行は、大歓迎を受けたが、江秀真さんの周りには、折しも開催されていた「ヒマラヤ登山国際シンポジウム」に参加している、75年チョモランマ・サミッター達が集り、祝福している姿が印象的であった。

ジャン・シュエチェン 1971年2月10日生

# ヒマラヤ登山国際シンポジウム(ラサ)

チベット登山協会と中国登山協会が主催する、「ヒマラヤ登山国際シンポジウム」が、5月21日ラサで開かれた。会議には、パキスタンからダウド・ベグ、パキスタン山岳協会副会長ら3名。ネパールから観光省のK, C. パダム氏、NMAのバサンタ・タバ氏ら3名。韓国から韓国山岳協会の金大煥副会長ら3名、韓国山岳連盟の南善祐氏ら2名、韓国ヒマラヤクラブの呉仁煥氏ら2名の計7名。台湾からは春のチョモランマ登山を終えたばかりの台湾山岳協会の梁明本隊長。中国登山協会は王富州主席、営道水交流部長。チベット登山協会はローサン・ダワ氏、ゴンブー氏、高謀興氏などの幹部。この他に中国国内からは、周正氏、張俊岩氏、75年チョモランマ登頂者のほとんどが顔を揃えた。参加者は50名であった。日本からは、HAJの私一人であった。

この会議の招待状を受け取った時の印象としては、世界各国から岳人や登山関係部署のメンバーが集うように感じた。そのためHAJの総会の開催される時期でありながら、予定をやりくりして参加したのであったが、現地に着いてみると、アジアのメンバーばかりであり、インドや香港などの参加もなかったのは意外であった。

会議は9時50分ゴンブー氏の開会の辞の後、参加者一人一人の紹介から始った。

10時、チベット登山協会ローサン・ダワ副主席が基調演説を行う。次いで中国登山協会王富州主席、ネパール、アン・ツェリン氏、パキスタン、

ダウド・ベグ氏が自国の状況を報告した。

午後は、私が日本のヒマラヤ登山の現状と遭難の実体を紹介し、テイクイン、テイクアウト運動はまだ緒についたばかりなので、今後徐々に効果が現われるだろうと報告した。次に韓国の金氏と南氏が報告。ネパールのバサンタ・タバ氏、パダム氏、最後に中国の周正氏が報告を行い会議を終了したのは17時30分であった。

会議の主旨がよくわからない場面があったり、運営も今一の感じであった。

翌日は午前中に改装したポタラ宮の見学を行い、午後はチベット登山隊のビデオ鑑賞があり、夜は歓迎会が行われた。希望者は23日からチョモランマBC訪問が組まれていたが、私は23日に成都へ飛んだ。

会議の内容は今一つ盛り上がり欠けたが、私は、合い間を縫って、韓国の呉氏や南氏と情報交換を行い、台湾の梁氏や林さんとも友好を深めることが出来て成果は上々であった。

また、87年ラプチェ・カン合同登山隊の成天亮氏とは、次の山についての情報交換を行うことが出来た。

王富州主席、ローサン・ダワ副主席も日本から唯一人私が参加したことをとても喜んでくれた。8年振りのチベットであったが、ジリジリと照りつける太陽が心地良かった。帰路機窓からミニヤ・コンカ北東支稜を見た。眠れる4人の霊に合掌し、母親達の待つ成都へと戻った。(山森欣一)



▲会議場風景



▲参加者記念撮影

# チベット登山隊の12名に荣誉奖章

5月19日北京から成都へ向かうボーイング757機の中で人民日報を読んでいると、チベット登山隊の12名（内女性3名）に、中華人民共和国体育運動委員会から「体育運動荣誉奖章」と賞状が贈られるとの記事が載っていた。

チベット登山隊は、西暦2000年までに八千メートル峰14座登頂を目指して作戦を展開中である。既にチョモランマ、チョー・オユー、シシャパンマ、ダウラギリI、アンナプルナIと5座を手中にし、今夏はガッシャーブルムのIとIIを目指して既にパキスタン入りしている。多分最後まで残るのはK2（チョゴリ）だろうと思われるが、目的達成度合は十分に高いと云える。

そうすると、当然のことながら現在個人で14座登頂を達成したメスナーとククチカに並ぶメンバーがこの9名の中から輩出する可能性も高い。油の乗り切った30代のメンバーが多いこともその可能性の高いことをうかがわせる。

表彰される女性の内、桂桑（グイサン）は、今年中国を代表する女性10人の中に選ばれたと云う。それは、少数民族であることや、スポーツの分野など幾つかの条件が重ってのことらしいが、スポーツの分野では一人だと云うから大変な名誉であろうと思う。

もう一人の女性拉吉（ラジ）と、男性の旺加

（ワンジャ）、達琼（ダチョ）、阿克布（アカブ）は、H A Jとチベット登山協会が、1987年に合同で初登頂したラブチェ・カンの仲間でもある。

チベット登山隊の益々の活躍と、無事を祈りたいものである。（記：山森 欣一）

## ▼表彰を報じる5月18日付 人民日報

### 国家体委向西藏登山健儿颁发荣誉奖章

据新华社拉萨5月17日电（记者多吉占堆）国家体委近日向12名作出突出贡献的西藏登山队藏族登山健儿颁发了“中华人民共和国体育运动荣誉奖章”和证书。

在这些登山队员中，9名男队员是西藏探险队的成员，他们在过去的2年内已连续登上了4座海拔8000米以上的高峰。探险队攀登队长、今年全国先进工作者次仁多吉，是中国唯一一名登上5座海拔8000米以上高峰的登山家，他还保持着在珠穆朗玛峰顶上停留99分钟的世界纪录。

另外3名队员则是藏族巾帼英雄桂桑、拉吉和普布卓嘎。她们于去年春季胜利登上了海拔8012米的希夏邦玛峰。37岁的桂桑还于1990年登上了珠穆朗玛峰。

氏名	生年月日	チョモランマ	ダウラギリI	アンナプルナI	チョー・オユー	シシャパンマM
1 次仁多吉	1958.10	1985.5.5	1993.5.30	1993.4.26	-	*1991.5.14 1944.5.7
2 旺加	1957.5.15	1990.5.10	1993.5.31	-	1985.5.1 1994.9.30	- 1994.5.7
3 仁娜	1961.8.5	1990.5.9	1993.5.31	1993.4.26	-	1994.9.30 - 1994.5.7
4 加布	1961.10.5	1990.5.7	1993.5.31	-	-	1994.9.30 1981.4.30 1944.5.7
5 大齐米	1957.6.5	1990.5.7	1993.5.31	-	-	1994.9.30 - 1944.5.7
6 洛澤	1962.5.13	1990.5.9	1993.5.31	-	-	1994.9.30 - 1944.5.7
7 達琼	1962.12	1990.5.9	1993.5.31	-	-	1994.9.30 - 1944.5.7
8 阿克布	1962.1.2	-	1993.5.30	1993.4.26	-	1994.9.30 - 1944.5.7
9 辺巴扎西	1965.3.20	-	1993.5.30	1993.4.26	-	1994.9.30 - 1994.5.7
10 桂桑	1956.10.5	1990.5.9 チョモランマ、1944.5.7 シシャパンマM				
11 拉吉	1970.9	1994.5.7 シシャパンマM、1987.10.26 ラブチェ・カン				
12 普布卓嘎		1994.5.7 シシャパンマM				

（注）次仁多吉の\*印は中央峰に登頂

## ミニヤ・コンカ訪中団峨眉山へ

昨年秋ミニヤ・コンカ 峰にて遭難した福沢卓也、渡辺靖之、鈴木洋介、工藤潤二 4 君の母上が、供養のため成都を訪問した。

当初は、ベース・キャンプ地への訪問の希望も寄せられており、その準備も進めていたが、諸々協議の結果、今回は 4 君の母上である福沢ヨシ子さん、渡辺園子さん、鈴木典子さん、工藤千鶴子さんが成都を訪問し供養を行うことになった。

5月19日成田10時25分発全日空便は、大陸に入り少し揺れたものの13時15分北京に到着した。空港は中国登山協会交流部長の陳尚仁さんと通訳の李豪傑さんが出迎えてくれた。空港で時間待ちをして、16時45分南西航空のボーイング757で北京を出発。曇天の成都に19時5分に到着した。さすがに蒸し暑い。四川省登山協会から猛天立部長と昨年の連絡官の高敏さん、私は何度か会ったことのある通訳の王在奇さんが迎えてくれる。宿舎である錦江賓館に入る前に四川省博物館内にあるレストランで夕食。ホテルに投宿後、部屋で5人で4時間ほど談笑。私は20日からラサへ向かうため峨眉山に同行できないのが残念であった。

20日から22日まで高さんと王さんの案内で、ミニヤ・コンカの往復共お世話になった李さんの運転する車で、峨眉山に登り、遙か西にミニヤ・コンカの姿を眺め、それぞれの想いを語り供養を行った。帰路楽山に立ち寄り懸崖大仏を見学した。

23日ラサから成都に戻った私は、四川省登山協会の汪光金副主席の出迎えを受け、市内の飯店で

母上達と合流した。汪副主席の歓迎宴を終えて、ホテルに戻った後、午後4時から文殊院（清代に建てられた大寺院）にて4君の供養を行った。母上達が持参した供物が正面左に用意された祭壇に供えられて供養は始まった。本堂には30名の僧と50名の唱和する信者らが整列し、厳かに読経が始められた。その間我々5人は僧侶の指示に従って何度も叩頭を繰り返した。そして、最後には本堂にいる全員が、本堂を読経に合わせて周回し、そのまま僧は奥院へと戻り供養は終わったのである。1時間にわたるこの読経の中で、家族の皆さんのそれぞれの想いが、ミニヤ・コンカに眠る4君に届いたと信じたい。厳粛な供養であった。

夜は、訪中団による答礼会を行ったが、登山協会からは、趙国栄主席ら9名が出席された。途中私の記憶がなくなり、母上の皆さんにご迷惑をおかけしたようだ。（勿論記憶にない。）

24日お世話になった四川省登山協会の皆さんと名残りを惜みながら、成都を7時20分の一番機で発ち、北京で李豪傑さんに迎えられ、そのまま海城にある万里長城に向う。ロープウェイが故障のため足で登ったが感慨一しおであった。登山研修所内にある岳人の碑にて供養を行う。

夜は中国登山協会の王鳳桐、曾曙生両副主席、陳部長らによる招宴が北京ダックで行われた。

25日午前中天安門から故宮を大急ぎで見学し、1週間にわたるミニヤ・コンカ訪中の旅を終え、20時過ぎ成田に帰着した。（記：山森欣一）



▲峨眉山にて（左から工藤、福沢、鈴木、渡辺）



▲文殊院での供養

# インド・ヒマラヤを楽しむ

## トレッキング／サファリ・コースの紹介

### はじめに

インド政府は、1994年に、これまで外国人が入域できなかったヒマチャール州のスピティ地区とラダックの北東部の一部を解禁した。このニュースでインドのトレッキング地域はかなり拡大したことになる。軍用道路を利用したヒマラヤ・サファリとも呼べるジープによる旅行が可能になった。また、トレッキング・コースもバラエティに富ものが計画できるようになった。

インドのトレッキングやサファリ実施の計画の参考になるよう、長年インド登山やトレッキングをハンドリングしてきたシカール・トラベル社の資料から同社の許可を得て、インド・ヒマラヤ・トレッキング／サファリのシリーズとして、コースの概要を紹介する。

文中の標高は概略（発行されている地図や資料で異なることがある）であり、また、地名のカタカナ書きは、できるだけ現地での発音の近いものと心がけた。しかし、地方によって地名の呼び方が異なったり、発音も微妙に違うこともあるのでカタカナ書きは必ずしも完全ではなく、参考程度と考えて欲しい。なお、英語の表記も括弧書きで併記しておいた。

ここに紹介したコースは、シカール・トラベル社のエスコート付きで実行可能なコースばかりなので、申し込みやコースの詳細や実施条件の詳細については同社に問い合わせられたい。特に、ツォモリリ湖、キンナウル・スピティ、西シッキムについては「制限地区入域許可」(Protected Area Permit)が必要なので、最低3ヶ月以上前に4人以上のグループで申し込まなければならないなどの条件があるので注意されたい。

なお、概算として示してある米ドルによる費用は、インド人ガイド付きの場合で、全行程の交通費、宿泊費、食事代などを合計したもので、4人

以上をベースとした1人分である。また、これらのインド・ヒマラヤ・サファリのコースへの日本語ガイドの手配はできない。シカール・トラベル社以外の旅行社でも手配可能であるが、どの旅行社に依頼しても、この費用に約20%の手数料が加算される。

シカール・トラベル社：(Shikhar Travels(I), Pvt.Ltd., 209 Competent House, F-14, Middle Circle, New Delhi-110001, INDIA.

Tel.(91)-11-3312444 Fax:(91)-11-3323660.

### 紹介するコース

下記のようなトレッキングやジープによるサファリを紹介する。連載の都合で必ずしもこの順番にならないことがあるので了承されたい。また、コースの状況は、政情の変化や気象条件等で変わることがあり、予定どおりに進めないことがあるので、そのような場合の対応を臨機応変に処理することが求められるのをある程度覚悟しておく必要がある。これは、インド・ヒマラヤ辺境地帯の旅行やトレッキングでは珍しくないことである。その上で、サファリやトレッキングを楽しむ余裕を持っていることが望ましい。

- ・キンナウル・スピティ・ラダック
- ・ダルチャからパダム
- ・ダラムサラ周辺
- ・西シッキム
- ・マナリからレーヘ
- ・ツォモラーリ湖
- ・パダムからラマユルへ
- ・マルカ谷のトレック
- ・ラマユルからドディタールへ
- ・ガンジスの源を訪ねて
- ・ケダルナート周辺
- ・「花の谷」トレック

インド・ヒマラヤを楽しむ

## その1 キンナウル・スピティ・ラダック

### シムラーからレー

推奨期間：7月中旬から8月中旬

概算費用：約1860ドル

参考日程：デリー発、デリー帰着。12日間

第1日：デリー滞在

デリーで出発準備。その日はデリーのホテル泊。

第2日：デリーからシムラへ（空路と車）

早朝にデリーを空路で出発し、チャンディガール（Chandigarh）着。チャンディガールを車で出発し、途中で昼食をとり、シムラ（Shimla）（2030m）に午後着。シムラの標高は約（2030m）で高原リゾート地として賑わっている。シムラではホテルに泊まる。

第3日：シムラからサラハンへ（ジープ）

朝食後、ジープでナラカンダ（Narkanda）を経由してサラハン（Sarahan）へ出発。

サラハンは山の中にある美しい所で、背後にはシュリカンド・マハデヴ（Shrikhand Mahadev）のピークが望見できる。サラハンに着いたら、先ず、仏教様式とヒンズー教様式の混在するユニークな建物であるビマカリ寺院（Bhimakali）を訪ねる。このお寺の本尊は、約200年前のものである。その夜はヒマチャール州政府経営のホテルに泊まる。

第4日：サラファンからサングラへ（ジープ）

朝食後、ジープでサングラへ出発する。

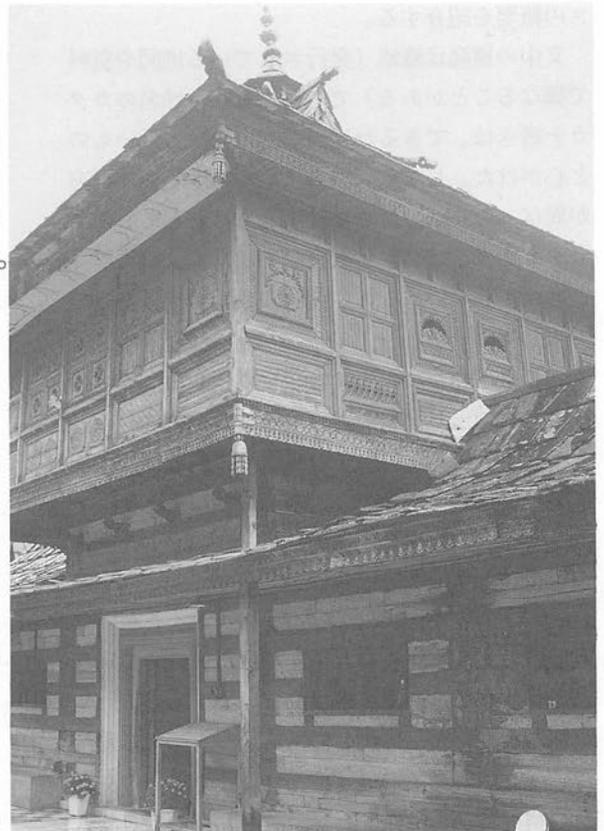
サングラ（Sangra）に着いて、街外れに移動し、バスパ（Baspa）川の近くでテントを張る。サングラは、キンナウル・カイルス（Kinnur Kailash）（約6600m）のピークが見える標高約2680mのすばらしい所である。カムルーの城跡（Kamru Fort）を訪ねる。城跡は、現在はカマクシ寺院（Kamakshi）になっている。テント泊。

第5日：サングラからチトクール峠経由プーへ（ジープ）

朝食後、ジープで約26kmを走行し、チトクール



サラハン周辺の村と山々



ビマカリ寺院（サラハン）

(Chitkul) 峠に着く。チトクール峠で小休止し、周辺の景色を楽しむ。

チトクール峠はガルワール・ヒマラヤ地方へのトレッキング・ルートとなっている。昼食をとり、プー (Puh) へ向かう。

プーはチベット国境近くにある雨の少ない所で、スピティ (Spiti) 川とサトレジ (Sutlej) 川の合流地点に位置して、ブドウや木彫り工芸品、ヒマラヤ杉の森があることで知られている。

プーではテントに泊まる。

第6日：プーからカザへ (ジープ)

プーをジープで出発し、途中、タボ寺院 (Tabo Monastery) を訪問する。タボ寺院は標高約3200mにあり、外部はドロでつくられた建物であるが、内部には美しい壁画が沢山あり、「ヒマラヤのアジャンタ」と呼ばれている。

標高約3450mのカザ (Kaza) へは夕方に到着し、ヒマチャール州政府管理のホテルに泊まる。

第7日：カザからキバルを経由してバタルへ

(ジープ)

カザをあとにして、カザから約11kmのところにあるキー寺院 (Kyi Monastery) へ向かう。

キー・ゴンパにはスピティ独特の壁画や彫刻があり、彫刻の文字はボティの言葉で書かれている。ボティ語はチベットからスピティに来て仏教を広めたボティアス族の言葉の古語である。キー寺院の標高は約4116mである。

キー寺院をジープで出発し、約9km先にあるキバル (Kibber) の村へ向かう。キバルの標高は約4400mであり、世界で一番標高の高いところにある村として知られている。この村に住んでいる人たちと交流したり、簡単であるが、しかし、システムティックに暮らせるような構造になっている民家を訪ねる。

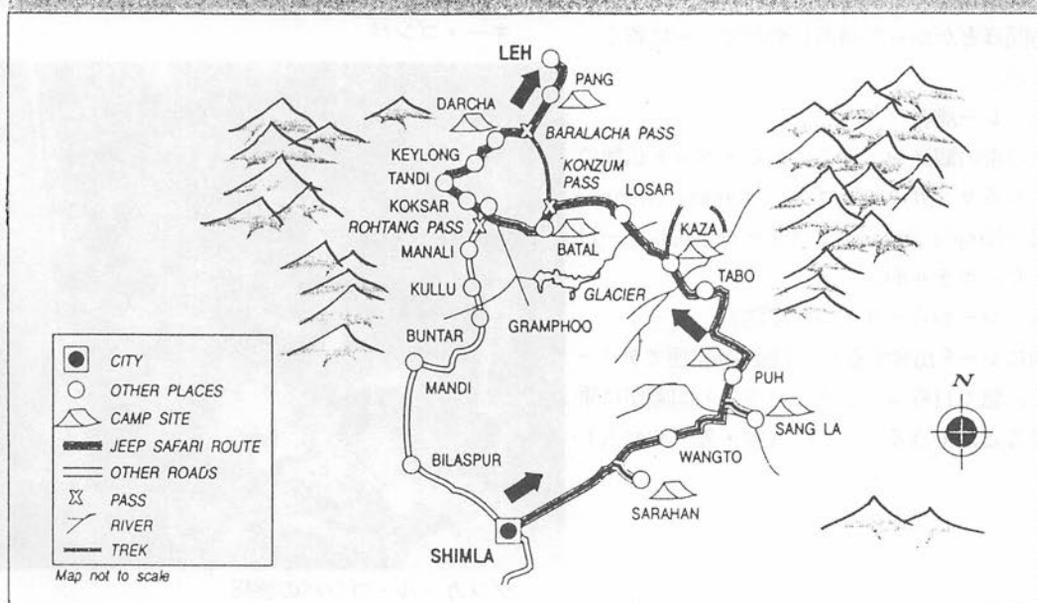
昼食を済ませ、ジープに揺られてクンザン・ラ (Kunzum La) の峠を経由してバタル (Batal) へ向かう。峠からはラホール (Lahaul) の山々の一角が手にとるように見え、タルチャー (Tarcho) と呼ばれるチベットの祈禱旗が風にはためいている。

峠から下り、バタルに着き、テントに泊まる。

第8日：バタルからダルチャへ (ジープ)

バタルの近くのバラ・シグリ (Bara Shigri) 氷河の朝の景色を楽しみ、ジープでダルチャ (D-

## HIMALAYAN SAFARI KINNAUR SPITI LADAKH



archa) へ向かう。途中、ケイロン (Keylong) を通過するが、近くにある、カルドン寺院 (Khardong Monastrery) を訪問する。カルドン寺院の標高は約3350mである。ケイロンは「緑のオアシス」と呼ばれている景色の良いところである。そして、バガ川の近くにあるダルチャに着き、川のそばにテントを張る。

#### 第9日：ダルチャからパングへ (ジープ)

ダルチャをジープで出発ししばらく走ると、やがて、バララチャ・ラ (Baralacha La) の峠に着く。峠の標高は4885mである。バララチャ・ラとは、「十字路の峠」という意味で、昔から、ザンスカール・ラダーック・スピティ・ラホルの4つの地方からの道が合流することから名付けられたという。峠の近くにはスルジャ・タール (Surja Tal) という美しい湖があり、この湖はバガ (Bhaga) 川の源流となっている。バララチャ・ラから4000mの高原地帯を走り、パング (Pang) へ着き、テント泊。

#### 第10日：パングからレーへ (ジープ)

パングを出発し、標高約4000mを超すキュングシュ高地 (Kyungshu Plains) を走り、レー (Leh) へ向かう。キュングシュ周辺にはキュン (Kyung) と呼ばれる羊に似た野生動物を見かけることがある。

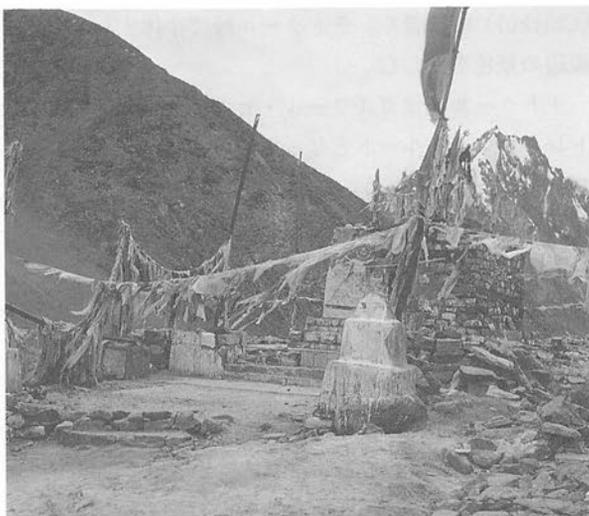
しばらくで標高5360mのタンラン・ラ (Tanglang La) に着く。舗装道路が通る峠としては世界で最高の標高にある峠である。峠から長い下りを2時間ほどかかって通過しやがてレーに着く。ホテル泊。

#### 第11日：レー滞在

レーの市内観光や、近くにあるチベット仏教のお寺であるサンカール・ゴンパ (Sankar Gompa)、旧王宮 (King's Palace)、バザールを訪ねて一日を楽しむ。ホテル泊。

#### 第12日：レーからデリーへ (空路)

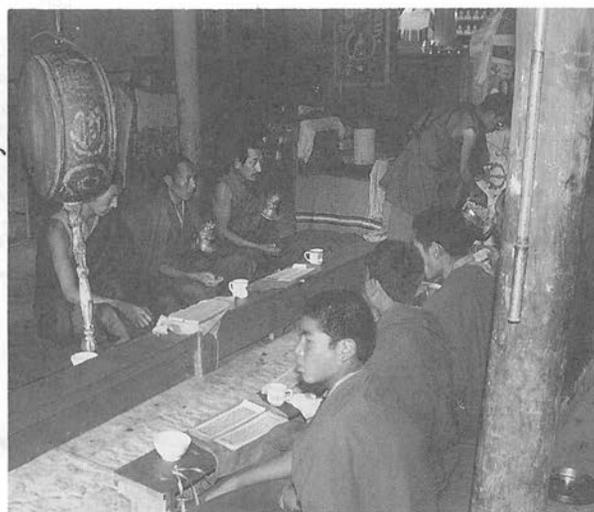
午前にレーを出発するインド国内航空便でデリーに着く。急ぐ日程なら、その日の夜の国際便に乗り継ぐことができる。 (編・著 沖允人)



クンザン・ラ (4551m)、背後はC B山群



キー・ゴンパ



ダンカール・ゴンパの読経

## 地域ニュース

### 《インド》

#### 隊員数は最高12名までに制限

インド登山財団（IMF）の発表によると、今年の6月1日からインド・ヒマラヤへの全ての登山隊（合同隊を含む）の隊員数を最高で12名までに制限されることになった。この数には登山隊に同行するトレッキング隊、撮影隊の人数も含まれるとの事。

これはヒマラヤのオーバー・ユースによる環境破壊を防ぐために取られた措置である。

### 《ネパール》

#### ネパール下院が解散・総選挙へ

ネパールのビレンドラ国王は6月13日、下院の解散を宣言し、11月23日に総選挙を行うと発表した。

解散・総選挙は、野党から内閣不信任案提出の揺さぶりを受けた共産党政権のアディカリ首相が国王に勧告していたもの。同首相は総選挙まで選挙管理内閣として実務を担当する。

### 《中国》

#### ニンチンカンサ峰へ日本の2隊

このほど、北京大学と福岡大学の'95夏期チベット・ニンチンカンサ峰合同登山準備会議が北京大学で開かれた。会議で、中日双方が合同登山、合同登山隊結成の関連事項についての会議書に調印した。

ニンチンカンサ峰は海拔7,191mで、チベット中部の中ネ友誼公路のすぐそばに聳える名峰である。

この登山活動は7月末から始まり、登山期間は約30日。この活動は中国登山協会と日本国際交流協会の協力のもとに、北京大学山鷹社と福岡大学山岳会がともに努力して実現させたものである。

その主旨は、中日友好の精神を発揚し、両国および両大学間の交流を強化することにある。全活動経費は中日双方が共同で負担することになっている。

一方、同時期に栃木県高体連登山部も同峰の西稜に挑む。同隊は石澤好文隊長（43）ら18名、他に学術隊6名が同行する。先発が7月16日、本隊が7月22日にそれぞれ出発し、カトマンズ経由で入山する。帰国は8月31日の予定。

#### 中国、空から国境巡視

中国人民解放軍の機関紙・解放軍報は6月15日、モンゴル、カザフスタンなどと接する新疆ウイグル自治区の国境巡視に軍が初めてヘリコプターを導入、空からパトロールを始めたことを伝えた。

初巡視は13日で、アルタイ軍分区の部隊を飛び立ち、山岳地帯を飛行。途中、地面から100mまで降下して国境をチェックした。馬やヤクで1週間かかった任務が3時間に短縮され、同紙は「国境巡視の歴史的一歩」と報道している。

#### パンチェン・ラマ後継者の少年、中国が拘束か

ダライ・ラマ亡命政権のニューデリー事務所は6月17日までに、パンチェン・ラマ10世の生まれ変わりに認定されたチベット人のゲドゥン・チョエキ・ニマ少年（6）が中国政府によりチベットから北京に連行されたとの情報を入手した。同事務所によると、ニマ少年が四川省・成都で拘束されているとの情報もある。

## トピックス

#### 改正旅券法の施行は11月1日

政府は6月9日の閣議で、一般旅券（パスポート）の有効期間を現行の5年から10年に延長することなどを定めた改正旅券法の施行期日を今年11月1日とすることを決めた。同日以降発給される旅券は有効期間を5年か10年か選べる。また、12歳未満を対象にした旅券が新設される。

手数料は5年旅券は現行通り1万円。10年旅券は1万5千円、12歳未満は5千円。

## 平成7年度理事会報告

日時 5月27日(土) 10時30分～12時30分

場所 HA J事務所

出席者 会長：遠藤登、監事：保坂昭憲  
 理事：稲田定重(福島)、小島守夫(栃木)、八木原罔明(群馬)、山森欣一、尾形好雄、中川裕(東京)以上本人出席6名。大内倫文(北海道)、八嶋寛(宮城)植松秀之(山形)、沖允人(栃木)、名塚秀二(群馬)、酒井国光(茨城)、関根幸次、飛田和夫、寺沢玲子(埼玉)、林雅樹(京都)、南勲(大阪)以上委任11名。(理事20名中、出席17名)

理事会の定足数は14名であるので成立。

議事 稲田理事長が議長となって以下の議案について審議した。

1) 議案1号：平成6年度事業報告及び収支決算報告について(承認)

現在、基本財産会計を設けているが、これは社団法人を目指すために設けられたもので、現在は全て運営費に使用されているので、会の実態を正しく表わすために、次年度からこの会計を無くし、終身会費収入は一般会計に計上する。従って貸借対照表上では、次期繰越欠損金と基本財産が相殺される。

2) 議案第2号：平成7年度事業計画及び収支予算について(承認)

3) 議案第3号：事務所移転に伴う定款の一部変更について(承認)

4) 議案第4号：会員の入会と除名について(承認)

5) その他：

・日常業務処理のため、特に定めるもの以外は、権限を常務理事会へ委任する。ことが承認された。

・運営資金の調達方法については、現在の会費でカバー出来るのは、人件費を除いた諸経費であり、会費から専従者の人件費は捻出出来ない。このままでは世代交代後の専従者確保が不可能となるので、「会員の拡大」をベースに当面、終身会員への移行を積極的に勧め、そのメンバーが代替りの

新会員を確保するなどの方法を講じていくことにした。

・次年度役員改選についての対応

1997年秋が本会の創立30周年に当たるので、この記念行事を現在の遠藤・稲田体制で行い、一連の記念行事終了後、新体制の組織を編成する事が確認された。

また、来年度が役員改選期であるが、本会の恒常的財政難のため、理事会出席に旅費の支給も出来ないため理事会に出席する理事の少ない現実や、本会執行部の世代交代や時代の流れを勘案し、当事者意識があり実際に会務にたずさわられるメンバーによる会運営とならざるを得ないため、地域にこだわらない、人物本位の方向で選任し、30周年記念行事を実行する中で世代交代を目指すこととなった。

・30周年記念行事については、「諸外国からのゲストを迎えての行事・式典」、「HA J 30年誌」、「記念野外活動(登山を含む)」の三つについて、常務理事会で分担して進行することとなった。

・山岳雑誌媒体とヒマラヤ情報の提供タイアップについては、本会の情報収集能力を鑑みて慎重に対応すべきと云う事になった。

## ヒマラヤから

## ヒマラヤ慢遊の旅

3月から慢遊の旅に出てインド(ソーラン、ダラムサラ)～ネパールのガネッシュ～ランタン～ゴサインクンド～ヘルンブーと歩いて(雪のため奥に入らず)西ネパールに移り、ドルポ～フォクスクンド湖～カンジェラルワ対面～カグマラ・ラ(5,115m)越え、念願のジャグドゥラ・コーラの山々にTysonに敬意を表して接見した次第です。

今日、PIAチケットを入手し、明日パキスタン(カラチ～ベジャワール～チトラル～ギルギット～パサー～フンジェラブ峠の予定)に移りますが、飛田さん、寺沢さん達に会えるかどうか、まだ帰る気にならず、昔からの放浪癖がよみがえって、(帰国は)7～8月になりそうです。

5/24カトマンズにて 阿部 淳

## ティリチ・ミール便り

アッサラーム アレイマム!!

日本滞在中(?)は色々とお世話になりありがとうございました。御陰様で無事帰国(?)出来ました。毎日暑いので着いた翌日一番にリキュール・パーミットを取ったのですが、ビールは売り切れ状態が続き、毎日ウィスキーを飲んでいます。L.Oとコックも決り、買い出しもほぼ終わって明日上部用の食料を買ってパッキングし、6月4日早朝にはチトラルへ向かいます。それではまた。(P.S)北海道の阿部氏がイスラマに来ております。今日は飛田さん達が帰って来るのでまた飲まねばなりません。

日本ヒンドゥー・クシュ登山隊一同

## インフォメーション

## 7月の東京集会

7月の東京集会は下記の通りです。

日時 7月24日(月)19時～

場所 HA Jルーム

## 事務所移転募金協力者ご芳名

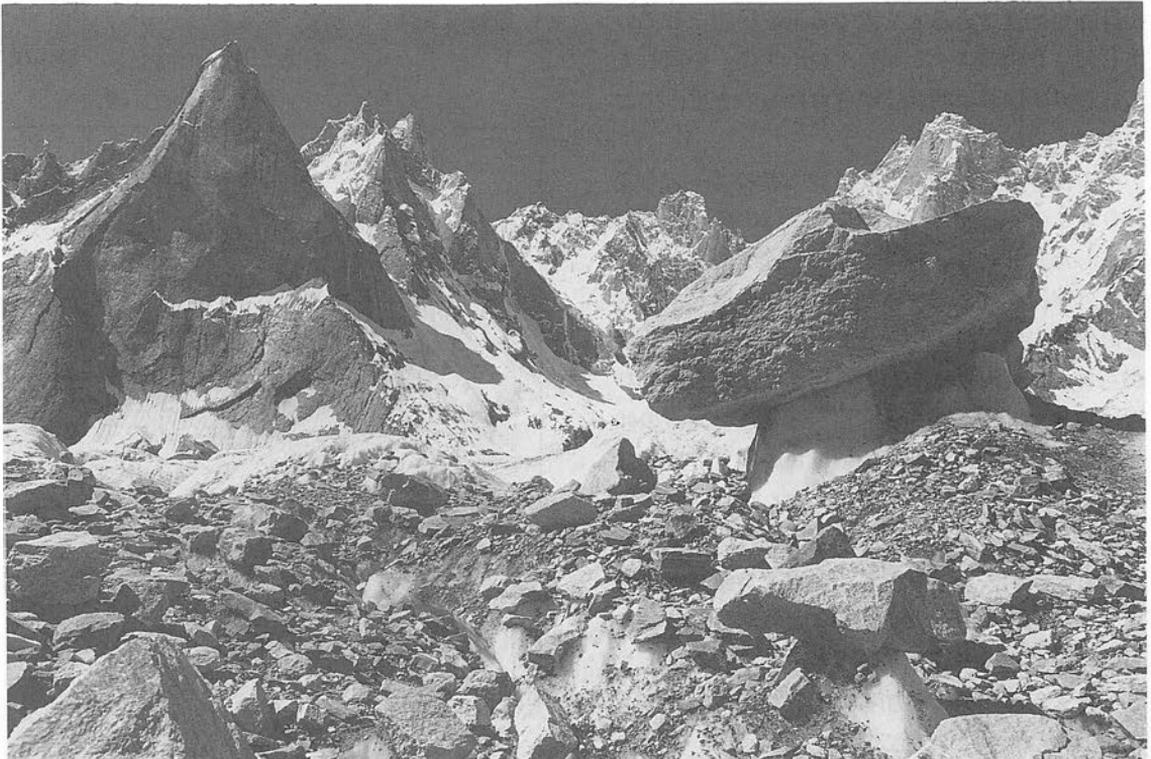
1口～星野龍史、加藤孝子。6月25日現在の累計額は、2,037,500円(敬称略)

## 訂正とお詫び

「カラコルムの氷河」に下記の誤りがありましたのでお詫びして訂正します。

No.283 : 12頁右4行の30cm→130cm。13頁右40行のテラ→チラ。14頁左37行の雌→幅。14頁右15行の氷と言→氷と雪。

No.248 : 3頁左27行の白い氷がひっくり返って→白い氷が一部張りついていた。氷河の底の氷がひっくり返って。



(お詫びと訂正) 前号10頁の写真12を差し違えました。(写真12) チャラクサ氷河の氷河卓(1994年6月) 枝氷河との合流点付近に見られたテーブルストーン。

## ヌン (7,135m) 登山計画

### 趣 旨

日本ヒマラヤ協会（H A J）は、1967年の創立以来、ヒマラヤ諸国との友好親善・相互理解をモットーに、登山・学術その他幅広い分野にわたって各種の文化活動を展開しております。1977年から1982年の6年間にわたって実施した「ヒマラヤ登山学校」もその一環でした。

この「ヒマラヤ登山学校」は、確かな技術経験を有するインストラクターの統括のもとに、必要とされる諸準備を進め、国内での学習を行い、ヒマラヤの高峰登山を実践する、ヒマラヤ登山の基礎と実際を体験しようとするヒマラヤ登山のガイドシステムでありました。そしてこのヒマラヤ登山学校を通して、さらに大きなヒマラヤ登山計画が推進できる人を育てる事を目的としていました。6年間の「ヒマラヤ登山学校」を通してこれらの所期の目的は達成されたものと思っております。

その後、時代の変遷と共に登山者のニーズも変わり、この「ヒマラヤ登山学校」は中断されておりました。しかし、年々増加の一途を辿る日本人の海外旅行熱は、ヒマラヤ各地にも伝播し、登山者の海外指向は隆盛をみせております。しかしながらこうした海外指向があるにもかかわらず、身近に良きアドバイザーが居なかったり、同行の仲間が得られないなどの理由で折角の夢も実現しないまま眠っている実情も少なくありません。

本会では、これらの現状を鑑み、特にH A J会員より要望の多い、夏期にインド・ヒマラヤにおいてサマー・キャンプを1989年より開設して参りました。登山の多様化が叫ばれている現在、ヒマラヤの大自然の懐で参加者の目的に適うような活動を展開したいと考えております。

今年、第6回を迎えました「インド、サマーキャンプ」は、2年振りにジャム&カシミール州の

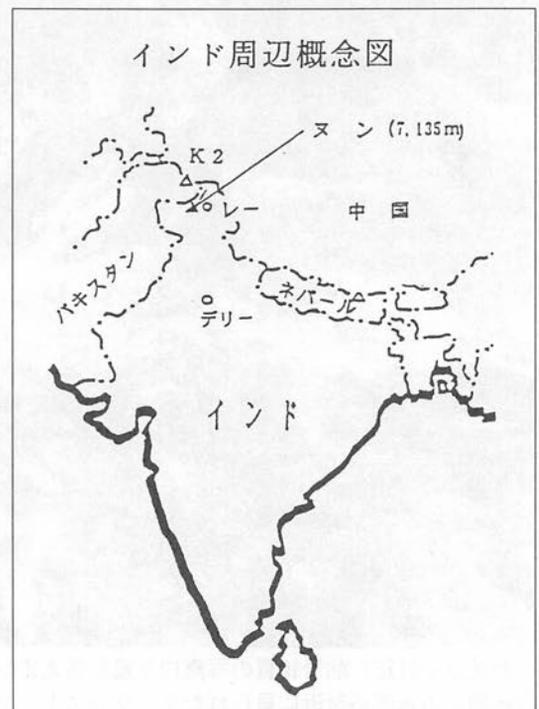
「ヌン峰」で実施いたします。このところ3年連続してサマー・キャンプの隊長を務めてきました酒井国光隊長以下11名が、この夏、H A Jにとって縁の深いこの山に挑みます。ヌン峰への登山はH A Jにとって8度目、かけがえの無いヒマラヤの自然、素晴らしい登山のフィールドを後の世代に残すためにも、もはや常識となりつつある「テイクイン、テイクアウト」の実践を通し環境への配慮にも心掛けます。

短期間で7,000m峰登山という今回のサマー・キャンプを無事成功裏に終え、さらに来年以後に継続し、所期の目的を達成するべく努力していきたいと思っております。

何卒、本登山隊の趣旨をご理解のうえ、皆様の絶大なご支援を賜りますようお願い申し上げます。

1995年5月

日本ヒマラヤ協会ヌン登山隊  
隊長 酒井国光



## 目標の山・登山目的

1. 目標の山  
ヌン (Mt. Nun 7,135m)  
インド、ジャム&カシミール州
2. 登山期間  
1995年7月23日～8月27日(37日間)
3. 登山の目的
  - 1) 西稜からのヌン峰登頂
  - 2) テイクイン、テイクアウトの徹底

## 隊の名称と構成

1. 隊の名称  
日本ヒマラヤ協会ヌン峰登山隊1995年  
(英文名) H A J Mt. NUN Expedition1995
2. 主催  
日本ヒマラヤ協会 (H A J)  
(The Himalayan Association of Japan)
3. 推進の組織  
日本ヒマラヤ協会ヌン峰登山隊実行委員会  
会 長 稲田定重 (H A J) 理事長  
実行委員長 山森欣一 (同 専務理事)  
副実行委員長 酒井国光 (同 理事、隊長)  
事務局 長 尾形好雄 (同 常務理事)  
委 員 八木原罔明、中川裕 (同  
常務理事、隊員)

登山隊事務局 (留守本部を兼ねる)

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7  
萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会

☎ 03-3988-8474 FAX 03-3988-8502

現地連絡先

C/O Shikhar Travel (P) Ltd.

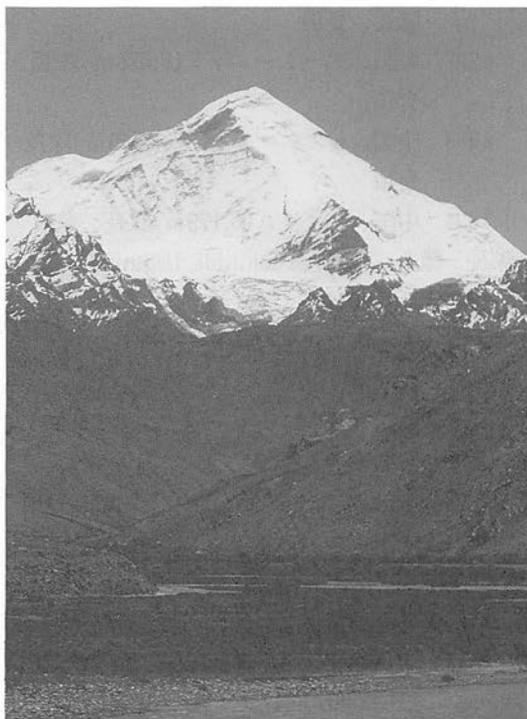
209, Competent House, F-14Middle Circle, Connaught Circus, New Delhi 110001, INDIA. Tlx 31-62664 SHIK IN

☎ (91)-11-331-2444, 331-2666

FAX (91)-11-3323660

## 日程概要

- 7/16 先発隊 (樋上、中川) 成田出発
- 23 本隊 (酒井、中村、山岸、東條、牧野、中島清、阿部、中島俊) 成田発
- 24 デリ→レー (飛行機)
- 25 レー滞在
- 26 レー→カルギル (バス)
- 27 カルギル→タンゴール (バス)
- 28・29 順応活動 (BC往復等)
- 30 タンゴール→BC (4,200m)
- 31 }  
} 登山期間21日
- 8/20 }  
} 21 BC→タンゴール→カルギル (バス)
- 22 カルギル→レー (バス)
- 23 レー→サルチュ (バス)
- 24 サルチュ→マナリ (バス)
- 25 マナリ→ニューデリー (バス)
- 26 ニューデリー9名発 (飛行機)
- 27 9名成田到着
- 30 ニューデリー2名発
- 31 2名成田到着



## 隊員名簿

- ①生年月日・年齢 ②住所・電話番号  
③勤務先名・電話番号 ④所属山岳会  
⑤海外登山歴

隊長：酒井 国光 (Kunimitsu Sakai)

- ① 1939年4月 生 (56歳)  
② 〒300-23 茨城県筑波郡
- ③ 聖徳大学附属小学校  
④ 昭和山岳会  
⑤ 1976 アメリカ、マッキンリー(6,194m)隊長  
1979 ヨーロッパ、アルプス数座、隊長  
1980 " " 隊長  
1983 パキスタン、ビルチャール・ドバニ  
(6,134m)登攀隊長  
1984 中国、アムネマチンII(6,268m)副隊長、登頂  
1986 アメリカ、ドラム(3,622m)隊長、登頂  
1988 パキスタン、ブロード・ピーク(8,047m)隊長、登頂  
1989 中国、シャラリ(6,032m)隊長代行  
1991 中国、シュエバオ・ディン(5,588m)隊長、登頂  
1992 中国、タークーニャン(5,025m)隊長、登頂  
1993 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)隊長登頂  
1994 中国、ユイチュ(6,179m)隊長、登頂

副隊長：樋上 嘉秀 (Yoshihide Higami)

- ① 1944年6月 生 (51歳)  
② 〒537 大阪市東成区
- ③ 交楽荘薬店経営  
④ 大阪わらじの会  
⑤ 1993 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)登頂  
1994 中国、ユイチュ(6,179m)登頂

登攀リーダー：中川 裕 ((Yutaka Nakagawa)

- ① 1960年8月 生 (34歳)  
② 〒114 東京都北区

- ③ (株)ビルワーク  
④ 明大駿台山岳部OB会  
⑤ 1981 ネパール、ガンガブルナ(7,454m)  
1990 インド、サトパント(7,075m)登頂  
1991 中国、ミニヤ・コンカ(7,556m)  
1992 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)  
中国、クラウン(7,295m)  
1993 インド、ヌン(7,135m)隊長
- 隊員：中村 喜吉 (Kiyoshi Nakamura)
- ① 1947年3月 (48歳)  
② 〒065 札幌市東区
- ③ 札幌白石郵便局  
④ えぞ山岳会  
⑤ 1974 旧ソ連 ジャントガン(4,050m)登頂  
1976 アラスカ・フォレーカー(5,303m)
- 隊員：山岸 喜世 (Kiyo Yamagishi)
- ① 1948年5月 生 (47歳)  
② 〒254 神奈川県平塚市
- ③ 神奈川県厚生協会  
④ 横須賀嶺朋会  
⑤ 1991 中国、シャオ・シュエバオ・ディン  
(5,540m)登頂  
1992 アルゼンチン、アコンカグア(6,959m)  
1994 中国、ユイチュ(6,179m)登頂
- 隊員：東條 利文 (Toshifumi Tojyo)
- ① 1950年12月 生 (44歳)  
② 〒514 三重県津市
- ③ 三重県立津東高等学校  
④ 無所属  
⑤ 1984 ネパール、ピサンピーク(6,091m)
- 隊員：牧野 総治郎 (Soujiro Makino)
- ① 1954年4月 生 (41歳)  
② 〒167 東京都杉並区
- ③ 牧野クリニック  
④ スキーアルピニズ研究会  
⑤ 1986 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)登頂  
1987 ヨーロッパ、モンテローザ(4,654m)

オートルート

1994 モンゴル、フィテン(4,374m)登頂

隊員：中島 清治 (Kiyoharu Nakajima)

- ① 1954年 9月 生 (40歳)
- ② 〒352 埼玉県新座市
- ③ 都立市ヶ谷商業高等学校
- ④ 獨標登高会
- ⑤ 1984・87・89・91 フランス、モンブラン (4,807m) 他

1994 インド、ヌンBCトレッキング

隊員：安藤 斎 (Tadasu Andou)

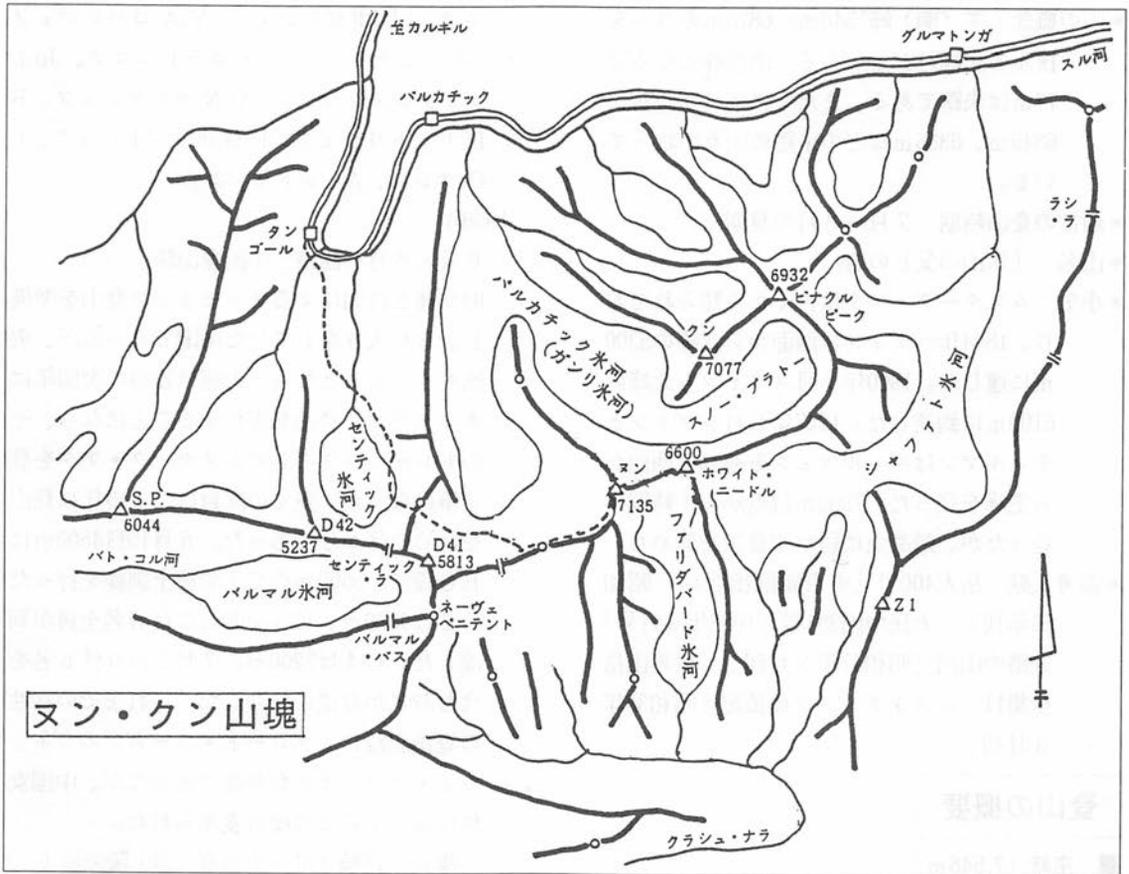
- ① 1959年 7月 生 (36歳)
- ② 〒969-11 福島県安達郡
- ③ 福島県県中家畜保健衛生所
- ④ 福島こまくさ山岳会
- ⑤ 1991 中国、タークーニャン(5,025m)登頂  
1992 インド、ヌン(7,135m)  
1993 アルゼンチン、アコンカグア(6,959m)

隊員：阿部 訟二 (Shouji Abe)

- ① 1963年 7月 生 (31歳)
- ② 〒340 埼玉県八潮市
- ③ モニー物探 (株)
- ④ 昭和山岳会
- ⑤ なし

隊員：中島 俊弥 (Toshiya Nakajima)

- ① 1964年 12月 生 (30歳)
- ② 〒399-07 長野県塩尻市
- ③ 武蔵工業大学付属信州工業高等学校
- ④ 昭和山岳会
- ⑤ 1986 アメリカ、ドラム(3,622m)登頂  
1991 ネパール、ダウラギリ I (8,167m) 登頂  
1993 中国、ムスターグ・アタ(7,546m) 登頂



## 1-7 ムスターグ・アタ(慕士塔格山・Muztag Ata) その1

\*山脈:パミール山脈。

\*位置:カシュガル(1289m)の南西約200km。  
[38° 15' N, 75° 10' E]

\*アプローチ:カシュガルまでは飛行機で2時間の旅。西面BCまではジープ半日でスバシに着く。翌日ラクダや馬、ロバなどを使用し半日で4500mのBC地に到達できる。

\*ルートの所要日数:94年HAJ隊は、BC設営後、20日間で登頂している。なお、スバシで2日間の高所順応活動をしている。通常は6850m付近のC3から頂上までの所要時間は7~8時間である。また、通常ルートの場合、頂上は左上方向にあり岩が露出している。従って、C3周辺から5時間程度で登頂したり、頂上がどこか判らないような登頂記は不自然である。

\*山の概念:主(南)峰7546m。6875mのCOLを挟んで北峰7184mがある。南西峰となる7277mは未踏である。また更に南に7028m、6849m、6355mなどの未踏の山々が眠っている。

\*通常の登山時期:7月~8月の夏期。

\*山名:[氷山の父]の意。

\*小史:ムスターグ・アタは古くから知られており、1894年ヘディン(ヘンリッヒ)は西面から北峰の5300mに達した。1900年7月スタインも北峰の6100mに到達した。1947年8月シプトンとティルマンはギャルツェンを連れて西面から主峰を登った。7300m付近から1時間半登ったが、最高点に届かず登頂を諦めた。

\*参考文献:岳人400号[東京新聞出版局 昭和55年刊] 人民中国351号[1982年9月号] 未踏の山河[昭和47年2月刊] 世界山岳全集11 ムスタグ・アタ登頂記[昭和35年3月刊]

## 登山の概要

■ 主峰(7,546m)

1956年

7月~8月 西稜 中国&旧ソ連合同隊

7月5日西面の4063mにBC設営。6200mにC3。20日6800mにC4設営。BCに下山し休養後、30日7200mにC4設営。翌31日中国側12名とソ連側19名の合計31名が岩のある頂上に立ち、パミールの名峰の初登頂が成し遂げられた。

[中国側隊長:史占春(29) 許競(29) 師秀(25) 胡本銘(25) 陳栄昌(25) 劉連満(25) 国徳存(24) 劉大義(23) 彭仲穆(21) 陳徳寓(22) 翁慶章(21) 彭淑力(20)]

ソ連側隊長:エフゲニー・ベレツキー(49) K.Kクジミン、V.S.ラチモフ、E.I.イワノフ、A.S.ゴチェフ、A.E.コフヤレコフ、P.K.スコロボガトフ、V.I.ポタポフ、A.V.セバスチャノフ、I.D.ボガトジェフ、V.A.コバレジェフ、I.A.シュチミン、B.L.ルコデレニコフ、Jo.I.テジェレノフリピン、G.N.セナトジェフ、B.D.ドミトリジェフ、R.G.ポタプトジュク、I.G.グレク、A.I.シドルンコ]

1959年

6月~8月 西稜 中国登山隊

旧ソ連と合同によるチョモランマ登山を準備し、BC入りをしていた中国であったが、突然キャンセルとなり、中国は独自に翌60年にチョモランマ登山を実行することになり、そのトレーニングとしてムスターグ・アタを登る事になった。多くの隊員は、この年に登山を始めたばかりであった。6月15日4500mにBC設営。5500mのC1で雪上訓練を行った。C2は6200m、C3は6800mには47名全員が到達した。C4は7200m。7月7日女性8名を含む32名が登頂に成功した。これまでの女性の登頂記録は、クロード・コーガンのガネッシュ・ヒマールIが最高であったが、中国女性によってここに塗り変えられた。

[隊長:許競(31) 史占春(31) 陳栄昌( )]

穆炳鎖 ( ) 王振華 (21) 拉巴才仁 石競 (21) 王富州 (24) 劉大義 (23) 多吉 (23) 米馬 (23) 張祥 岳保娃 張俊岩 ( ) 胡本銘 ( ) 屈銀華 ( ) 趙国光 周信德 貢布 (25) 索南多吉 (23) 崔之久 謝武成 衛林 閻棟梁 王義勤 (F) 王貴華 (F) 叢珍 (F) 西繞 (F) 周玉瑛 (F) 齋米 (F) 查姆金 (F) 潘多 (F) 以上登頂者 王鳳桐 (22) 袁揚 (F22) 彭淑力 沈傑 邵子慶 劉啓明 胡德銘 ツレー (F) 崔忠義 多吉布ら総計 47名]

#### 1980年

7月 西稜 アメリカ隊

開放後初の入山。西面通常ルートのC1までラクダで荷上げ。スキー使用。2週間の順応活動を行い、21日隊長、レイノルズ、ラウエルの3名がスキーを使用して登頂し、下降した。レイノルズは女性のスキー登山の記録となった。

[隊長：ネッド・ジレット (35) ゲイラン・ラウエル (40) ジャネット・レイノルズ (F24) リチャード・ドワース ジョー・サンダース キャメロン・バングス]

#### 1981年

6月 西稜 京都カラコルムクラブ

コンゲールの高所順応のために入山。6月9日西面にBC設営。スキーを使用して2つのキャンプを出し、6月下旬土森、嶋、寺西、松見、二上、安田、城崎が登頂した。

[土森譲 (44) 嶋満則 (36) 寺西洋治 (36) 松見新衛 (35) 安田越郎 (32) 武藤英生 (32) 二上純一 (29) 城崎英明 (23)]

9月 西稜 カナダ=アメリカ隊

9月5日チャル・トマック氷河の側にBC設営。通常ルートの一つ南の氷河をルートに採り、新ルートから16日に全員登頂した。

[隊長：ジョン・アマット、ロイド・ギャラガー、パット・マロー、ステファン・ベズルッカ]

#### 1982年

7月 西南西稜 オーストリア隊

8日4500mにBC設営。アルパイン・スタイ

ルで5200m、6100m、6700mと泊まり17日に隊長、ヴァグナー、ホフヴィンマー、ハインツェル、ケンドラーの5名が新ルートから登頂した。

[隊長：マルクス・シュムック (57) ヘルムート・ヴァグナー (31) エーリヒ・ホフヴィンマー (43) ゴットフリート・ハインツェル (45) パルサザー・ケンドラー (56) オットー・ロセンベルグ (61) ヘンドリック・デ・ボクシ (49) フランツ・エルゾーグ (32) ロルフ・ウィデルホファー (44) アルミン・ヴィットレリー (42) 医師]

7月 西稜 アメリカ隊

28日2名が登頂したが、下山中吹雪のためロジャー・カークパトリック (41) が転落死亡した。

8月 西稜 国際隊

ジョン・クリア隊長ら11名の国際隊が、17日と18日に8名を頂上に送った。この中には両足義足のイギリス人ノーマン・クラウチャー (41) も含まれている。

9月~10月 南西稜 北沢登山クラブ

10月4日4900mにBC設営。10日から渋谷を除く4名が6000m、6100m、6300m、6600m、7000mと泊まり、15日鈴木、高木が登頂した。[隊長：矢葺敬造三 (34) 鈴木章平 (35) 渋谷利晴 (31) 林田雄二 (23) 高木裕 (27)]

#### 1984年

8月 西稜 イタリア=フランス隊

イタリアのアイベルト・レーとフランスのクロード・ジャクの率いる国際隊20名は、19日と20日に17名を頂上に送った。ルチア・マルツェット、テレーザ・ガイオット、マルゲリータ・ソラリの3名はイタリア女性の高度記録となった。

#### 1985年

6月 西稜 アメリカ隊

アメリカのマイクル・ジャーディン隊長以下6名に日本の笹生博夫が加わり、6月18日BC設営。落雷事故の影響で上に向かったのは、笹生とジョン・アサートンの2名であったが、結局6300mが最高到達点となった。

[隊長：マイクル・ジャーディン、ケヴィン・コールベティ、ジョン・アサートン、マーク・アモンズ、R.M.リー、ベン・エイセマン、笹生博夫]

[アメリカ隊と飛んだ7000m峰スキー遠征記(笹生博夫)「山と溪谷601号」]

1986年

7月～8月 西稜 西域登山研究会

佐藤文明隊長以下7名。7月26日BC設営。

8月12日C3(6900m)から隊長と牧野が登頂。16日にも菅沼ら女性5名が登頂。

[隊長：佐藤文明(37)菅沼弘子(34)大高珠美(28)小林チェミ(27)西村伸子(27)三原洋子(45)牧野総治郎(32)]

[北へ北へ頂へー夢馳せた追憶の日々(三原洋子)「ヒマラヤ225号」]

[氷山の父—ムスターグ・アタ登頂と頂上からのスキー滑降(牧野総治郎)「山と溪谷625号」]

1987年

7月～8月 西稜 国際隊

南北両峰の登頂を目指して入山。7月21日からまず北峰を狙ったが、悪天続きで6130mで断念。8月2日南峰に向かう。8日にガイヤールら3名。12日日本人2名を含めた5名が登頂した。

[隊長：マイクル・ジャーディン、笹生博夫、尾崎啓一]

[微笑んだ中央アジアの双頭の峰、ムスターグ・アタ(尾崎啓一)「山と溪谷628号」]

8月 西稜 フランス/イタリア隊

6日にBC設営。16日に隊長ら6名が登頂。22日に2度目となる隊長とショーヴェがリュースと共に登頂した。

[隊長：エリック・ドカン、マルク・ショーヴェ、パオロ・アンリ、ピエール・ガイヨ、フランソワーズ・ヴァルテル、アンドレ・ルケク、ギー・リュース]

1988年

4月 西稜 フランス隊

ドミニク・マルシャル隊長率いる公募隊が、20日と23日に登頂した。

7月 西稜 フランス隊

7月16日に4名が登頂。

8月 西稜 フランス隊

8月18日に3名。20日に4名が登頂した。

[J-M.ルー-フィエ、C.トマン、M.トマン、F.カーレ、J-B.カーレ、G.フォーリ、J.マネス]

1989年

5月～6月 西稜 京都大学

5月11日BC設営。氷の露出多く困難度が増していた。5500m～5800mのアイス・フォールに18本の固定メロープを使った。6500mにC3を設営。2度のアタックは失敗。

30日富永と藤田が登頂。翌日隊長、中山、白沢も登頂した。尚、登頂はスキー使用。

[隊長：松沢哲郎(38)瀬戸嗣郎(38)出水明(37)中山茂樹(27)富永浩三(30)白沢あずみ(22)藤田耕史(20)]

[ヒマラヤ学誌第一号(1990年3月刊)]

7月～8月 西稜 台湾隊

呉夏雄隊長ら13名で入山。11日BC設営。6700mにC3設営。21日に女性を含む2名とシュルバが登頂。28日2名、29日2名も登頂した。

[隊長：呉夏雄、蔡楓彬、蔭麗雲、林光彦、馬育伸、呉錦雄、林瑞皆、曹俊彦、徐慧敏、陳菊枝、洪宗隆、黃清得、張銘隆]

7月 西稜 スペイン隊

18名で7月4日入山。26日にアルベサ、27日イバニェスら5名。28日ロペスら11名が登頂した。

[隊長：トニー・ヴィヴェス、C.アルベサ、L.イバニェス、B.コロム、M.ピュエタス、P.ニコラス、J.ドミンゴ、J.マルチネス、L.ロペス、F.アルベサ、E.リポル、J.フェレロ、J.ペルズ、M.フレッカス、A.ロベルト、N.ヴィヴェス、F.ランザゴ]

8月 西稜 中国/日本

篠崎純一(30)が中国の旅行社2名と組んで入山。C3を6350mに設営。中国人は高山病のためC3上から引き返したが、篠崎

は単独で頂上を目指し、18日登頂した。

〔青春アドベンチャー行～篠崎純一さん、7ヶ月でアジアの12座をいっき登頂 「岳人512号」〕

8月 西稜 フランス隊

18日にJ-P.コスタとM.ペイエがスキーを使って登頂し滑降した。

#### 1990年

7月～8月 西稜 鶴岡ヒマラヤ研究会

7月30日BC設営。5800mにC2設営するも悪天とぶつかり日数不足のため、6200mで登頂を断念した。

〔隊長：稲泉眞彦(48) 板垣允俊(45) 船越重幸(42) 三笠喜美夫(38) 新田勉(38) 菅原和明(34) 伊藤吉樹(31) 加藤健二郎(46)〕

〔絲綢之路の白き峰 ムスターグ・アタ 1991年12月刊〕

7月～8月 西稜

鶴岡隊と同時期にイタリアの2隊と、ニュージーランド隊が入山。

#### 1991年

7月～8月 西稜 長野県海外登山研究会

7月23日BC設営。C3を6500mに設営。8月6日松原が、7日に両伊藤も登頂した。尚、スキーを使用した。

〔隊長：前沢昌弘(47) 松原繁(49) 伊藤康徳(41) 中平重治(30) 伊藤正(26) 小林照男(25) 東尾崇高(24)〕

7月～8月 西稜 日本山岳会

7月27日BC設営。11日6400mにC3を設営。12日石川、佐々木が10時30分出発し17時30分登頂した。スキー使用。

〔隊長：相馬勉(31) 石川慶英(24) 滝沢守生(22) 佐々木毅彦(23) 田中清隆(21) 中里雄一(20)〕

〔ムスターグ・アタ登山(相馬勉)「山558号」1991年11月20日〕

〔慕士塔格山(ムスターグ・アタ)登山の記録(相馬勉)「山岳第八十七年」〕

7月～8月 西稜 福岡県山岳連盟

7月30日BC設営。C3を6500mに設営。17

日矢田、福泉、黒川、古賀、詫間、横内の6名が10時間で登頂。21日久田、岡崎、光安、副島、松藤、高橋の6名も登頂した。

〔隊長：植松満男(54) 諸岡久二郎(66) 安達敏則(55) 岡崎猷之(49) 矢田康史(43) 古賀幸信(46) 福泉亮(34) 副島敏夫(37) 詫間悟(39) 松藤ゆきえ(33) 野見山雄二(43) 光安隆雄(37) 野口和子(52) 高橋俊之(29) 岡崎光(40) 横山信洋(20) 黒川溶三郎(29) 小林宏樹(22) 久田康照(37)〕

8月～9月 西稜 スペイン隊

8月8日BC設営。6800mにC3を設営。20日隊長ら2名、22日1名、23日に2名が登頂した。

〔隊長：カルロス・ソリア、ハビエル・マルティネス、フルヘンシオ・カサド、アントニオ・タピアドール、ホセ・カルロス・リャマス〕

8月 西稜 韓国隊

C2を6200mに設営。チ・ヒュンオクとチャン・チュリギの2名が登頂したが、帰路7100mでピバークとなった。

〔隊長：キム・ジン-ギ、チ・ヒュンオク(F) チャン・チュリギ、総勢9名〕

#### 1992年

7月～8月 西稜 日本ヒマラヤ協会

7月23日BC設営。8月5日C3を6700mに設営。10日頂上アタックを行うも悪天とぶつかり約7000mで登頂を断念した。

〔隊長：山森欣一(48) 出口當(50) 橋本康弘(38) 二俣勇司(37) 斎藤繁(30) 木辺正夫(60) 田村正勝(50) 滝田収(35) 秋山和彦(33) 中川裕(31) 橋本珠樹(31)〕

〔氷山の父に挑む「ヒマラヤ257号」〕

〔永別 皇冠峰 (1994年5月刊)〕

7月～8月 西稜

HAJ隊と同時期にロシア隊、ドイツ隊、スエーデン隊、スペイン隊が入山。

平成7年度

## 日本ヒマラヤ協会通常総会報告

日時 平成7年5月27日(土) 13時10分～13時40分

会場 かんぼヘルスプラザ東京

出席者 本人出席：遠藤登会長、稲田定重、山森欣一、小島守夫、八木原罔明、尾形好雄、中川裕(以上理事)、保坂昭憲(監事)、鈴木正典(山形)、鈴木雄一、森山安次、大久保博、吉田憲司(以上東京)、野沢井歩、泉田清幸、安部博(以上神奈川)

定足数 以上本人出席16名、委任状提出者309名、の確認 合計325名。

定款第25条の規定により会員現在数の3分の1以上の出席により成立。現在の会員総数は805名で、定足数は269名。よって総会は成立。

総会次第

### 1) 開 会

尾形常務理事の司会で定刻より10分程遅れて開会。開会に先だち遠藤会長より挨拶があり、財政確保のためにも、より多くの会員拡大を図る必要がある、是非とも絶大なご協力をお願いしたいと述べられた。

次いで定款の定めるところにより、議長には稲田理事長があたり、議事録署名人に野沢井歩、鈴木正典両氏を選んで議事に入った。

(書記には尾形常務理事があたる)

### 2) 議 事

議案各号に関して山森専務理事より説明がなされ質疑に入った。

①第1号議案 平成6年度事業報告について

②第2号議案 平成6年度収支決算及び財産目録の報告について

収支決算報告に伴い保坂監事から適正な会計収支報告である旨の監査報告がなされた。

以上、別紙報告の第1号議案、第2号議案とも異議なく承認された。

③第3号議案 平成7年度事業計画について

④第4号議案 平成7年度収支予算について

以上、別紙報告の第3号議案、第4号議案とも異議なく承認された。

⑤第5号議案 会員の除名について

定款第8条に従って、再三の督促にもかかわらず会費未納の22名が除名対象者として提案され、承認された。

⑥第6号議案 定款の一部変更について

会事務所の住所変更に伴い、定款第2条を下記の通り変更したい旨の提案があり、承認。

[現行]

第2条 本会は、事務所を東京都新宿区高田馬場3丁目23番1号に置く。

[変更後]

第2条 本会は、事務所を東京都豊島区東池袋4丁目2番7号に置く。

⑦その他、理事会報告

山森専務理事から総会に先だって開催された理事会の報告がなされた。

運営資金の調達方法について、現在の会費でカバー出来るのは、専従者の人件費を除いた諸経費であり、このままでは世代交代後の専従者確保が不可能となるので、「会費拡大」をベースに当面、終身会員への移行を積極的に勤め、終身会員による会員拡大のキャンペーンを展開していきたいので協力をお願いしたいと呼びかけられた。

また、1997年の創立30周年記念行事に向けての準備と其後の会運営の執行体制についての話についても報告がなされた。

\*

以上をもって全ての議案審議を終え、平成7年度の通常総会は終了した。

## 平成6年度事業報告書

自 平成6年4月1日

至 平成7年3月31日

I. 定款第4条1項にもとづく事業（ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存及び、それらの利用希望者に対する便宜供与）

### 1. 情報管理事業

1) 会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・登山計画の企画・研究等の指導。

年間500件を越す電話による問い合わせと100件を越える事務所への来訪者へ情報提供と指導を実施した。又、会員の求めに応じて、地域へ出向き登山計画推進の指導を実施した。

2) 文献・資料のレファレンスサービス  
一般的に入手しづらいものに限定してサービスを実施した。ヒマラヤ諸国の登山規則や地図等に関する希望者が多い。

### 2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業

調査・研究の一部分を実施し、体制づくりに着手した。

II. 定款第4条第2項にもとづく事業（登山をはじめとする野外活動と関連する処分野に関する研究活動と成果の公表）

### 1. 調査研究事業

1) 高所登山における事故防止に関する調査研究

続発する高所登山の事故を分析し、事故防止のために研究成果を「インドヒマラヤ会議」、「高所登山 事故と環境対策研修会」を通して発表した。

又、ヒマラヤにおける日本隊の死亡事故は、1968年から27年間連続して発生しており、この不名誉な記録を一旦ストップさせ、今後の事故対策に新機軸を打ち出す一助として「ヒマラヤ登山 日本隊遭難の記録」をまとめて刊行した。

2) 高所登山に対する意識調査

今後の調査事項・方法について検討した。

### 2. 出版事業（研究・報告）

1) 「八千メートル峰、日本人の記録」の発行準備を行った。

2) 「ヒマラヤ」英文ダイジェスト版の発行準備

### 3. 関連学術事業

インドへ派遣する予定であったが諸事情が整わず中止した。

III. 定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣）

### 1. 高所登山事業

1) ルンポ・カンリ（7,095m）登山隊の派遣

4月11日～6月13日に八嶋寛隊長以下9名を派遣したが、6,200mで登頂を断念した。

2) 日中友好女性合同登山隊の派遣

6月30日～7月24日に寺沢玲子隊長以下4名を派遣し、中国・青海省登山協会とユイシュ（5,933m）の登頂を目指し、7月14日日本側4名、中国側3名の全員が登頂に成功した。

3) ムスターグ・アタ（7,546m）登山隊の派遣

7月21日～8月28日に飛田和夫隊長以下7名を派遣し、8月18日と19日の両日で全員登頂に成功した。

4) ユイチュ（6,179m）登山隊の派遣

7月21日～8月13日に酒井国光隊長以下6名を派遣し、8月3日全員が登頂に成功した。

5) ミニヤ・コンカ（7,556m）登山隊の派遣

8月17日～10月25日の予定で山森欣一隊長以下7名を派遣したが、9月28日に4名の隊員がC3周辺にて消息を絶ち遭難した。このため登山を中止し10月15日に帰国事故報告を行った。

6) 直轄プロジェクトの推進

イ) 平成7年度「ヌン（7,123m）登山」

夏の登山実施に向けて本格的に隊を構成（酒井国光隊長以下11名）した。

- ロ)平成7年度「ムスタグ・アタ(7,546m)登山」  
夏の登山実施に向けて隊員を募集したが、応募者が少なく中止した。
- ハ)平成7年度「ユイチュ(6,179m)登山」  
夏の登山実施に向けて隊員を募集したが、応募者が少なく中止した。
- ニ)平成7年度「キンヤン・キッシュ(7,852m)」  
夏の登山実施に向けて本格的に隊を構成(飛田和夫隊長以下4名)した。
- ホ)冬期K2登山  
検討委員会を設けて可能性について検討したが、具体化するに至らなかった。尚、当初プレK2登山として提案のあった「キンヤン・キッシュ登山隊(飛田和夫隊長以下4名・1995年6月12日～8月27日)」については、常務理事会で検討した結果、隊員構成、隊員数等からプレK2登山としての位置付けはできないが、既に準備も進行しているので単独隊として承認された。
- ヘ)平成8年度「ムスタグ・アタ(7,546m)」&「ユイチュ(6,179m)」登山  
夏の実施に向けて中国登山協会に申請中。
- ト)ナンダ・デヴィ(7,816m)登山  
実施に向けて関係当局と協議した。
- チ)サガルマータ(8,848m)登山  
創立30周年記念行事の一環を目指して実施に向けて募集を開始したが、ネパール政府の急激な規則改正により、費用が高騰し、実施の見直し中である。
- 7)登山許可申請と取得  
魅力あるヒマラヤの高峰について、各国に対して前年に引き続き許可申請を行った。
2. 野外活動事業
- 1)北東部インド調査隊の派遣  
秋に派遣を予定していたが、条件が整わず延期した。
- 2)スピティ、ラダック地区走破隊の派遣  
8月7日～28日に沖允人隊長以下3名を派遣した。
- IV、定款第4条第4項に基づく事業(機関誌、その他の刊行物、登山・野外活動、研修・各種の会合によるこの分野の健全な発達を図るための指導・啓蒙活動)
1. 機関誌発行事業  
「ヒマラヤ」269号～280号を毎月発行した。(毎月24～28ページ)
2. 出版事業
- 1)「ナマステ!サラスワティ」を発行した(4月)
- 2)「永別 皇冠峰」を発行した(5月)
- 3)「崑崙の頂を踏む」を発行した(5月)
- 4)「ヒマラヤ登山 日本隊遭難の記録」を発行した(5月)
- 5)「インドヒマラヤの手引き・改訂版」を発行した(1月)
- 6)各登山隊の報告書発行準備を行った。
- 7)「ヒマラヤ教本」の発行準備を行った。
3. 指導・啓蒙事業
- 1)日本ヒマラヤ会議の開催  
各地の条件が整わず開催出来なかった。
- 2)定例集会  
東京(毎月)札幌(臨時)開催した。
- 3)第16回「インド・ヒマラヤ会議」の開催  
1月8日に開催した。参加者60名。
- 4)第2回「高所登山・事故と環境対策研究会」の開催  
4月2日に開催した。参加者60名。この事業は笹川スポーツ財団の後援を受けた。
- 5)高所登山懇談会の開催  
開催出来なかった。
- 6)公式報告会  
ルンボ・カンリ隊(6月)女性合同隊(7月) ユイチュ隊(8月)ムスタグ・アタ隊(9月) ミニヤ・コンカ隊(10月)等のスライドによる報告会を東京集会で実施。
- 7)壮行会  
4月、6月、7月に行った。計画発表と

地域事情伝達。

V. 定款第4条第5項にもとづく事業（その他、前条の目的を達成するために必要と認める事業）

1. 国際交流事業

1) 外国代表の招請

特に実施しなかった。

2) 代表派遣

特に実施しなかった。

3) 来日したヒマラヤ諸国の関係者との懇親

イ) 新疆登山協会苑化常副主席を団長とする代表団の歓迎会（4月、東京）

ロ) 中国登山協会王富州主席を団長とする代表団の歓迎会（6月、東京）

ハ) 中国登山協会曾曙生副主席と懇談（11月、東京）

2. 国内関係団体との協調

イ) 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（HAT-J代表・田部井淳子）と協調して、ヒマラヤの環境保護啓蒙活動を実施した。

ロ) 日山協、JAC、労山と協調して「プラスチック製登山靴突然破壊問題」について継続して協議を行った。

ハ) その他、(社)日本山岳協会等と協力・情報交換等を行った。

3. 組織の整備

7月に合同臨時理事会・評議員会を開催し、現状分析を行い、今後共これまでの活動を継続することが決定されたが、新年（1995年1月）から専従者を1名とすることが決定され、尾形好雄常務理事が専従を離れた。

4. 事務所の移転

高田馬場の淀橋食糧ビル改築に伴い、退去依頼があったため、7月の上記会議を受けて、活動を継続するための事務所として、11月に新たに東池袋の萬栄ビルに移転した。

5. 遭難事故の処理

10月15日ミニヤ・コンカ登山隊の事故報告を、東京で行った。

平成6年度収支決算書

自 平成6年4月1日

至 平成7年3月31日

I. 一般会計

(収入の部)

(単位: 円)

勘定科目		予算額	決算額	増・減(△)
大科目	中科目			
入会金収入		( 750,000)	( 400,000)	(△ 350,000)
	入会金収入	750,000	400,000	△ 350,000
会費収入		( 5,000,000)	( 4,565,500)	(△ 434,500)
	通常会員会費	5,000,000	4,565,500	△ 434,500
	賛助会員会費	-	-	-
事業収入		( 27,000,000)	( 18,950,545)	(△ 8,049,455)
	野外活動事業	5,000,000	0	△ 5,000,000
	高所登山事業	20,000,000	13,968,697	△ 6,031,303
	指導啓蒙事業	400,000	438,800	△ 38,800
	機関誌発行事業	800,000	832,543	32,543
	出版事業	800,000	3,076,505	2,276,505
	国際交流事業	0	634,000	634,000
雑収入		( 170,000)	( 364,004)	( 194,004)
	受取利息収入	10,000	1,615	△ 8,385
	その他雑収入	160,000	362,389	202,389
前期繰越		(△ 20,905,943)	(△ 20,905,943)	( 0)
	前期繰越	△ 20,905,943	△ 20,905,943	0
特別収入		( 0)	( 4,508,500)	( 4,508,500)
	財政&移転収入	0	4,508,500	4,508,500
保険金収入		( 0)	( 4,500,000)	( 4,500,000)
	受取保険金	0	4,500,000	4,500,000
合計		12,014,057	12,382,606	368,549

(支出の部)

(単位: 円)

勘定科目		予算額	決算額	増・減(△)
大科目	中科目			
管理費		( 12,000,000)	( 10,762,456)	(△ 1,237,544)
	給料手当	8,000,000	7,296,700	△ 703,300
	旅費交通費	0	0	0
	通信運搬費	400,000	452,548	52,548
	電話費	400,000	265,812	△ 134,188
	消耗品・文具費	100,000	38,831	△ 61,169
	宮備用品費	0	0	0
	印刷製本費	700,000	794,429	94,429
	図書費	50,000	56,400	6,400
	貸借料	1,700,000	1,383,905	△ 316,095
	光熱水費	130,000	168,702	38,702
	会議費	20,000	8,000	△ 12,000
	広報費	400,000	214,711	△ 185,289
	雑費	100,000	82,418	△ 17,582
事業費		( 28,100,000)	( 18,543,950)	(△ 9,556,050)
	野外活動事業	4,600,000	0	△ 4,600,000
	高所登山事業	19,000,000	11,299,869	△ 7,700,131
	指導啓蒙事業	400,000	507,773	107,773
	機関誌発行事業	2,800,000	2,968,346	168,346
	出版事業	1,000,000	2,989,449	1,989,449
	国際交流事業	300,000	778,513	478,513
	その他事業	0	0	0
特別支出		( 0)	( 2,633,084)	( 2,633,084)
	事務所移転費	0	1,383,119	1,383,119
	事故処理費	0	1,249,965	1,249,965
次期繰越		(△ 28,085,943)	(△ 19,556,884)	( 8,529,059)
合計		12,014,057	12,382,606	368,549

## II. 基本財産会計

(収入の部)

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
運用利息	0	62,362	62,362
終身会費収入	300,000	1,580,000	1,280,000
前期繰越	10,463,750	10,463,750	0
合計	10,763,750	12,106,112	1,342,362

(支出の部)

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
一般会計繰り入れ	0	0	0
次期繰越	10,763,750	12,106,112	1,342,362
合計	10,763,750	12,106,112	1,342,362

## III. ヒマラヤ研究所会計

(収入の部)

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
調査研究収入	50,000,000	0	△5,000,000
合計	5,000,000	0	△5,000,000

(支出の部)

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
管理費	4,000,000	0	△4,000,000
調査費	1,000,000	0	△1,000,000
合計	5,000,000	0	△5,000,000

## V. 財産目録

(平成7年3月31日現在、単位：円)

種別	摘要	金額
1. 現金		( 29,474)
	手許現金	29,474
2. 普通預金		( 1,801,767)
	三菱銀行新宿支店No.4455421	571,211
	第一勧業銀行高田馬場支店No.1099791	1,062,276
	住友信託銀行新宿支店No.5136696	145,372
	東商信用金庫新宿支店No.063468	1,388
	東京銀行新宿支店No.558060	21,520
3. 郵便振替		( 867,474)
	00100-6-48954	867,474
4. 金銭信託		( 2,964,006)
	住友信託銀行新宿支店	2,964,006
	157,538(1,412,286)	
	167,188(1,551,720)	
5. 未収金		( 100,000)
	終身会員申込者未収金	100,000
6. 備品		( 200,000)
	事務所備品	200,000
10. 登山装備		( 800,000)
	中国・デボ品	600,000
	インド・デボ品	200,000
資産合計		15,540,466
11. 未払金		( 112,360)
	柴田金之助	100,000
	秦東製鋼	12,360
12. 預り金		( 1,064,000)
	新入会者 13名	161,000
	サガルマータ記念登山申込金 6名	900,000
	小松達・カンチェンジュンガ	3,000
13. 前受金		( 1,917,133)
	ヌン登山隊	1,917,133
14. 借入金		( 11,150,000)
	柴田金之助	2,000,000
	遠藤登	150,000
	植松秀之	600,000
	小島守夫	500,000
	渡辺 齊	300,000
	住友信託銀行新宿支店	2,600,000
	稲田定重 扱い	5,000,000
負債合計		14,243,493
差引正味負債		7,450,772

## 貸借対照表

(平成7年3月31日現在、単位：円)

借方		借方	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
現金	29,474	未払金	112,360
普通預金	1,801,767	預り金	1,064,000
郵便振替	867,474	前受金	1,917,133
金銭信託	2,964,006	借入金	11,150,000
未収金	100,000	基本財産	12,106,112
預け運営基金	30,000	次期繰越欠損金	△ 19,556,884
備品	200,000		
登山装備	800,000		
合計	6,792,721	合計	6,792,721

## 平成7年度事業計画書

自 平成7年4月1日

至 平成8年3月31日

I. 定款第4条第1項にもとづく事業（ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存及び、それらの利用希望者に対する便宜供与）

### 1. 情報管理事業

日本ヒマラヤ研究所の機能と連携しつつ、

- 1) 会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・登山計画の企画・研究等の指導。
- 2) 文献・資料のレファレンスサービス  
一般的に入手しづらいものに限定してサービスを実施する。

### 2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業

助成金を得て設置し、本会活動の一方の主軸とする。

- 1) 運営方針の策定
- 2) 財務渉外と専任研究員の配置

II. 定款第4条第2項にもとづく事業（登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表）

### 1. 調査研究事業

- 1) 高所登山における事故防止に関する調査研究
- 2) 高所登山に対する意識調査
- 3) 山岳の自然環境を汚染しないで実施する登山・踏査活動の研究

### 2. 出版事業（研究・報告）

- 1) 「八千メートル峰、日本人の記録」の発行
- 2) 「ルンポ・カンリ」の発行（4月）
- 3) 「葱嶺の白き父なる山」の発行（4月）
- 4) 「女性合同登山隊」報告書の発行（10月）
- 5) 「ミニヤ・コンカ登山隊」報告書の発行（3月）
- 6) 「ヒマラヤ」英文ダイジェスト版の発行準備

### 3. 関連学術事業

興味ある地域への派遣準備

III. 定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤ

への登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣

### 1. 高所登山事業

- 1) キンヤン・キッシュ（7,852m）登山隊の派遣

6月12日～8月27日飛田和夫隊長以下4名を派遣。

- 2) サマー・キャンプ、ヌン（7,135m）登山隊の派遣

7月23日～8月27日酒井国光隊長以下11名を派遣。

### 3) 直轄プロジェクトの推進

- イ) 平成8年度「ヌン（7,123m）登山」

夏の登山実施に向けて隊を構成する。

- ロ) 平成8年度「ムスターグ・アタ（7,546m）登山」

夏の登山実施に向けて隊の構成する。

- ハ) 平成8年度「ユイチュ（6,179m）登山」

- ニ) サガルマータ（8,848m）登山

創立30周年記念行事の一環を目指して実施に向けて募集を開始したが、ネパール政府の急激な規則改正により、費用が高騰し、実現不可能な見通しであるため、他の地域に振り替えて検討する。

### 4) 登山計画の策定と許可申請及び取得

我国の昨今の高所登山分野での現状を分析しつつ、登山の大衆化の分野の声に添えと共に、一方の柱となる未知と困難への挑戦の分野の育成を念頭においた魅力あるヒマラヤの高峰について、企画立案を行いそれぞれの国に対して前年に引き続き登山許可申請を行いこれの取得を行う。

### 2. 野外活動事業

- 1) 会員の要望を調査し、ヒマラヤ各国の魅力ある地域踏査隊の派遣を企画立案する。

IV. 定款第4条第4項に基づく事業（機関誌、その他の刊行物、登山・野外活動、研修・各種の会合によるこの分野の健全な発達を図るための指導・啓蒙活動）

### 1. 機関誌発行事業

「ヒマラヤ」281号～292号を毎月発行。

2. 出版事業

- 1) 「中国登山の手引き・第4版」の発行  
(6月)
- 2) 「ヒマラヤ教本」の発行準備

3. 指導・啓蒙事業

- 1) 日本ヒマラヤ会議の開催  
各理事・評議員と協議し、条件が整い次第随時開催する。
- 2) 地域集会・定例集会の開催  
東京(毎月)、各地域評議員と協議して随時開催する。
- 3) 第17回「インド・ヒマラヤ会議」の開催  
平成7年度隊報告と、8年度計画隊の情報交換。
- 4) 第3回「高所登山・事故と環境対策研修会」の開催
- 5) 公式報告会  
各登山隊について東京集会にて実施する。
- 6) 壮行会  
各隊について計画発表をかねて行う。  
(5月、7月)

V. 定款第4条第5項にもとづく事業(その他、前条の目的を達成するために必要と認める事業)

1. 国際交流事業

- 1) 外国代表の招請  
渉外上必要と認められる代表について慎重に検討の上、随時招請する。
- 2) 代表派遣  
イ) 中国登山協会、チベット登山協会主催「国際登山シンポジウム」へ代表を派遣する。(5月)
- 3) 各ヒマラヤ諸国の関係者との交流  
イ) 来日したヒマラヤ諸国の登山関係者や在日大使館関係者と懇談する。(随時)

2. 国内関係団体との協調

(社) 日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、  
(社) 日本山岳会、HAT-J、日本登山医学学会その他関係団体と事業提携・協力・情報交換を行う。

3. 組織の整備

- 1) 常務理事を中心とした事業分担制の検討
- 2) 事務局支援体制の確立  
会員のボランティアの発掘を行い、専従員の補完を目指す。
- 3) 財政強化の対策。  
終身会員への移行の推進。
- 4) 会員拡大の強化。
- 5. ミニヤ・コンカ登山隊遭難事故の処理
  - 1) 合同追悼会の実施(札幌・4月)
  - 2) 家族の現地訪問(成都・5月)
  - 3) 事故検討会と報告書の発行

都道府県別会員数

(平成7年5月20日現在・除名後)

北海道	68(2)[11]	68	三重	9	55
青森	7(1)		和歌山	5	
秋田	8		奈良	1	
岩手	7 [1]		滋賀	7(1)	
宮城	20(3)[1]		京都	15(1)	
山形	30(4)		大阪	27(1)[2]	
福島	27(5)[4]	99	兵庫	23 [1]	78
栃木	18(2)[2]		岡山	4(1)	
群馬	37(8)[6]		広島	10(2)[2]	
茨城	15(1)[1]		鳥取	2	
埼玉	50(10)[8]		島根	1	
千葉	27(4)[5]		山口	5(1)[1]	
神奈川	65(8)[10]	212	香川	4 [1]	
東京	155(23)[18]	155	愛媛	1(1)	
山梨	9		徳島	0	
新潟	3		高知	4(1)	31
富山	8 [1]		福岡	23(2)	
石川	10(1)[1]		佐賀	3(1)	
福井	4		大分	5	
長野	27(3)	61	長崎	10	
静岡	8 [1]		熊本	2	
愛知	27 [1]		宮崎	3	
岐阜	11(2)[1]		鹿児島	0	
国外	9		沖縄	0	46
会員			総数	805(89)[79]	

\* ( )内は終身会員数 [ ]内は女性数

総数 805(89)[79]

\* 総数805名(内、夫婦会員30名)この他に外国会員12名

平成7年度収支予算

自 平成7年4月1日  
至 平成8年3月31日

I. 一般会計

(収入の部)

(単位:円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
入会金収入		( 500,000)	( 750,000)	(△ 250,000)
	入会金収入	500,000	750,000	△ 250,000
会費収入		( 6,000,000)	( 5,000,000)	(△ 1,000,000)
	通常会員会費	6,000,000	5,000,000	△ 1,000,000
	賛助会員会費	-	-	-
事業収入		( 8,000,000)	( 27,000,000)	(△19,000,000)
	野外活動事業	0	5,000,000	△ 5,000,000
	高所登山事業	6,500,000	20,000,000	△13,500,000
	指導啓蒙事業	200,000	400,000	△ 200,000
	機関誌発行事業	800,000	800,000	0
	出版事業	500,000	800,000	△ 300,000
	国際交流事業	0	0	0
	その他事業	0	0	0
雑収入		( 150,000)	( 170,000)	(△ 20,000)
	受取利息収入	2,000	10,000	△ 8,000
	その他雑収入	148,000	160,000	△ 12,000
保険金収入		( 1,500,000)	( 0)	( 1,500,000)
	受取保険金	1,500,000	0	1,500,000
前期繰越		(△ 19,556,884)	(△20,905,943)	( 1,349,059)
	前期繰越	△ 19,556,884	△20,905,943	1,349,259
合計		△ 3,406,884	12,014,057	△15,420,941

(支出の部)

(単位:円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
管理費		( 8,670,000)	( 12,000,000)	(△ 3,330,000)
	給料手当	5,000,000	8,000,000	△ 3,000,000
	旅費交通費	0	0	0
	通信運搬費	400,000	400,000	0
	電話費	300,000	400,000	△ 100,000
	消耗品・文具費	100,000	100,000	0
	宮繕備品費	0	0	0
	印刷製本費	700,000	700,000	0
	図書費	50,000	50,000	0
	貸借料	1,650,000	1,700,000	△ 50,000
	光熱水費	150,000	130,000	20,000
	会議費	20,000	20,000	0
	広報費	200,000	400,000	△ 200,000
	雑費	100,000	100,000	0
事業費		( 11,850,000)	( 28,100,000)	(△16,250,000)
	野外活動事業	0	4,600,000	△ 4,600,000
	高所登山事業	5,000,000	19,000,000	△14,000,000
	指導啓蒙事業	150,000	400,000	△ 250,000
	機関誌発行事業	3,000,000	2,800,000	200,000
	出版事業	500,000	1,000,000	△ 500,000
	国際交流事業	200,000	300,000	△ 100,000
	事故処理費	3,000,000	0	3,000,000
次期繰越		(△ 23,926,884)	(△ 28,085,943)	4,159,059
	次期繰越	△ 23,926,884	△ 28,085,943	4,159,059
合計		△ 3,406,884	12,014,057	△15,420,941

II. 基本財産会計

(収入の部)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
運用利息	50,000	0	50,000
終身会費収入	1,500,000	300,000	1,200,000
前期繰越	12,106,112	10,763,750	1,342,362
合計	13,656,112	10,763,750	2,892,362

(支出の部)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
次期繰越	13,656,112	10,763,750	2,892,362
合計	13,656,112	10,763,750	2,892,362

III. ヒマラヤ研究所会計

(収入の部)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
調査研究収入	5,000,000	5,000,000	0
合計	5,000,000	5,000,000	0

(支出の部)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
管理費	4,000,000	4,000,000	0
調査費	1,000,000	1,000,000	0
合計	5,000,000	5,000,000	0

終身会員移行のお願い

本会の円滑な運営を行うためには、専従者を置くことがどうしても必要です。しかしながら、現状の会員数では、一般会費でまかなえる範囲は、機関誌発行費、事務所家賃、水道光熱費、通信費、電話費、印刷費までです。

本会は創立以来28年となり、そろそろ執行部の世代交代の時期を迎えております。ボランティアで専従の任務をお願い出来る人材は望める状況にはありません。専従者を置いて事業を継続するためには、諸々の条件を考慮するならば有給とならざるを得ません。さりとて、現在の日本の経済状態の中では、外部資金の導入はとて出来ないのが現状です。

このような現状をふまえて、本会の事業継続のために、会員の皆様に終身会員への移行と、新規会員獲得を是非お願い申し上げます。

## ■ 寸 感 ■

エヴェレスト女性初登頂20周年を記念して“エヴェレスト・ウィメンズ・サミット '95”が東京で開催され、6ヶ国から10人の女性エヴェルスターが一同に会した。女性初登頂からこの20年間で31名32回の女性が登頂している。

来日したサミッターに天もほほえみ、好天の富士登山をプレゼントされた。

## 事務局日誌(6月)

- 9日(金)～10日(土) 15回登山医学シンポジウム(鎌倉、山森)  
 10日(土) ヒマラヤNo.284発送  
 12日(月) キンヤン・キッシュ本隊出発  
 17日(土) スノー・バー作り(近喰宅)  
 22日(木) エヴェレスト・ウィメンズ・サミット参加のインド代表、パチェンドリ・パル、サントシュ・ヤダブ両氏の成田出迎えと歓迎パーティ(カンチ、サラスワティ隊他)

- 23日(金) ー 同 ー 歓迎パーティ(遠藤、山森、八木原)  
 24日(土) ー 同 ー シンポジウム(日生日比谷ビル国際ホール)  
 24日(土)～25日(日) ヌン隊梱包  
 26日(月) 東京集会(15名)  
 27日(火) エヴェレスト・ウィメンズ・サミット、サヨナラ・パーティ(品川プリンス<sup>®</sup>)(遠藤、山森、八木原、尾形、名塚)

## ヒマラヤ No.285 (8月号)

平成7年7月10日印刷 7年8月1日発行  
 発行人 稲田定重  
 編集人 尾形好雄  
 発行所 日本ヒマラヤ協会  
 〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7  
 萬栄ビル501号  
 電話 03-3988-8474  
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必携品

## ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモウバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター  
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階  
 TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510  
 (隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

## TREASURE TOUR



## EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、  
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

## 遙かなる高み



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手合い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。  
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山  
シルクロード・秘境旅行  
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(3237)1391(代表)  
キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル4階 ☎03(3237)8384(代表)  
大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)  
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707  
運輸大臣登録一般旅行業607号

# ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



## Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブライカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブライカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メイルオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004